

---

令和5年度前橋市  
ヤングケアラーに関する実態調査  
報告書

---

令和6年3月

# 実施概要

## 調査目的

ヤングケアラーと思われる児童生徒への支援策を検討するため、以下3回の調査を実施した。調査方法は、学校用タブレット端末等を用いたWebアンケート形式とし、個人を特定せず匿名で実施した。

(調査1)

本市立学校に在籍する児童生徒を対象に、家庭環境や日常における支援の状況、ヤングケアラーという概念の認知度などについて調査し、本市におけるヤングケアラーに関する実態を把握することを目的に実施した。

(調査2)

本市立学校に勤務する教職員を対象に、ヤングケアラーと思われる児童生徒への支援経験や、支援における外部機関との連携状況などについて調査し、学校におけるヤングケアラーと思われる児童生徒に対する支援の実態を把握することを目的に実施した。

(調査3)

調査1において、お世話の悩みを相談した経験が少ないことや、お世話をしている児童生徒が必要としているサポートについて「自分の今の状況について話を聞いてほしい」との回答があったことなど、相談支援に関する課題が示されたことから、本市立学校に在籍する児童生徒を対象に、相談支援に関する事項について調査し、児童生徒の意識を把握することを目的に実施した。

## 調査対象と調査期間

	調査対象	調査期間
調査1	市立小学校生（5・6年次） 市立中学校生（全学年） 市立前橋高校生（全学年）	令和5年7月6日から令和5年7月20日まで
調査2	市立小学校、市立中学校、特別支援学校及び市立前橋高校に勤務する教職員	令和5年10月31日から令和5年11月13日まで
調査3	市立小学校生（5・6年次） 市立中学校生（全学年） 市立前橋高校生（全学年）	令和5年12月6日から令和5年12月19日まで

## 回答率

### 調査1

	小学生 5・6年生	中学生	高校生	学校種 無回答	合計
対象者数	4,888	7,782	708		13,378
回答数	3,596	3,356	414	55	7,421
回答率	<b>73.6%</b>	<b>43.1%</b>	<b>58.5%</b>		<b>55.5%</b>

### 調査2

	小学校勤務	中学校勤務	高校勤務	特別支援学校 派遣職員等	合計
対象者数	1,026	587	67		1,680
回答数	597	325	43	30	995
回答率	<b>58.2%</b>	<b>55.4%</b>	<b>64.2%</b>		<b>59.2%</b>

### 調査3

	小学生 5・6年生	中学生	高校生	学校種 無回答	合計
対象者数	4,888	7,782	708		13,378
回答数	2,840	3,205	216	59	6,320
回答率	<b>58.1%</b>	<b>41.2%</b>	<b>30.5%</b>		<b>47.2%</b>

## 集計・分析の留意点

本調査の単純集計において、「家族の中にお世話をしている人がいる」と回答した児童生徒は7.3%（540人）、「自分自身がヤングケアラーにあてはまる」と回答した児童生徒は1.4%（103人）であった。

これらの集計を基に詳細な実態を把握するため、クロス分析を行った。なお、クロス分析では有効回答数が十分に確保できないことから、市立前橋高校の在校生及び教職員のデータは除外している。

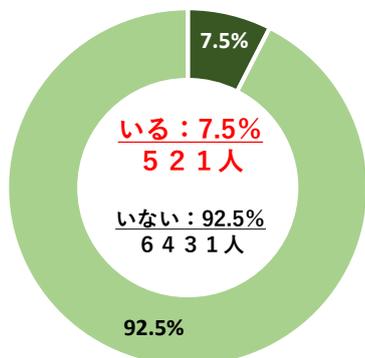
結果は百分率（%）で表示し、小数点以下第2位を四捨五入して算出した結果、個々の比率の合計が100%にならないことがある。

本文及び図表中、意味をそこなわない範囲で質問文は簡略化している。

# 調査分析結果

## 1：ヤングケアラーと思われる児童生徒の割合

### 1-1：お世話をしている家族がいる割合

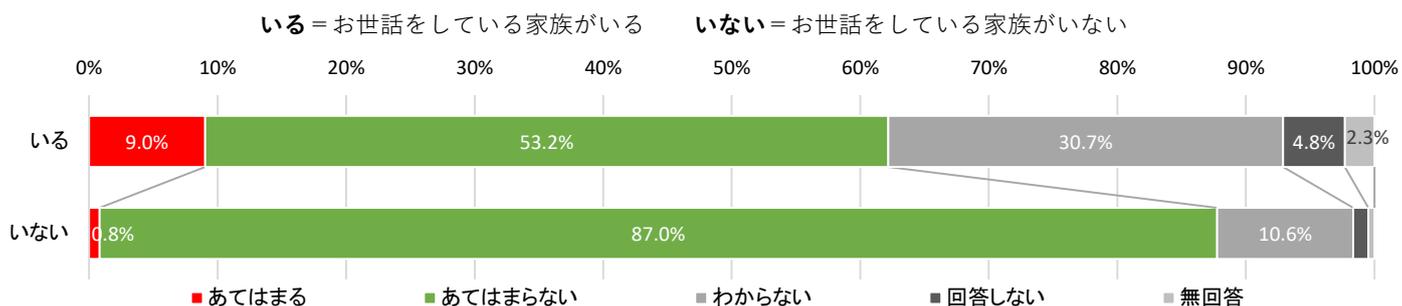


### 1-2：お世話をしている家族がいる割合（学年別）



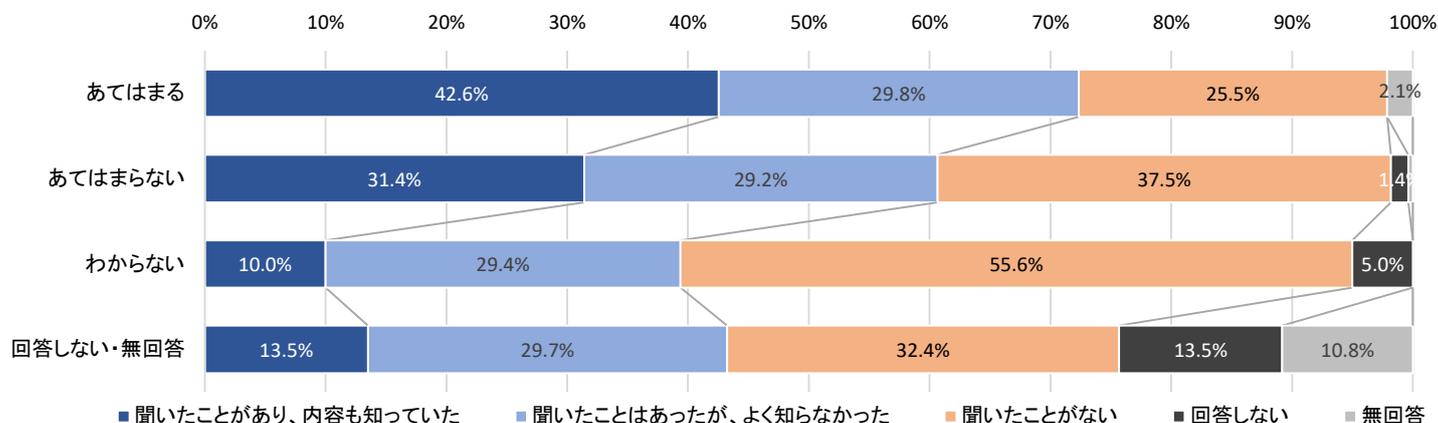
お世話をしている家族が「いる」と回答した児童生徒の割合は、回答者のうち7.5%（521人）であった。学年別の内訳では、小学5年生と6年生で、お世話をしている家族が「いる」と回答した割合が比較的多かった。

### 1-3：お世話をしていると回答した児童生徒で、自身が「ヤングケアラー」と自覚している割合（「お世話をしている家族の有無」と「自身がヤングケアラーに当てはまるか（自覚）」を比較）



お世話をしている家族がいる児童生徒で、ヤングケアラーにあてはまると回答した者は9.0%（47人）であった。

### 1-4：「ヤングケアラー」であることの自覚と「ヤングケアラー」という言葉の認知度の関係性（「自身がヤングケアラーに当てはまるか（自覚）」と「ヤングケアラーという言葉の認知度」を比較）



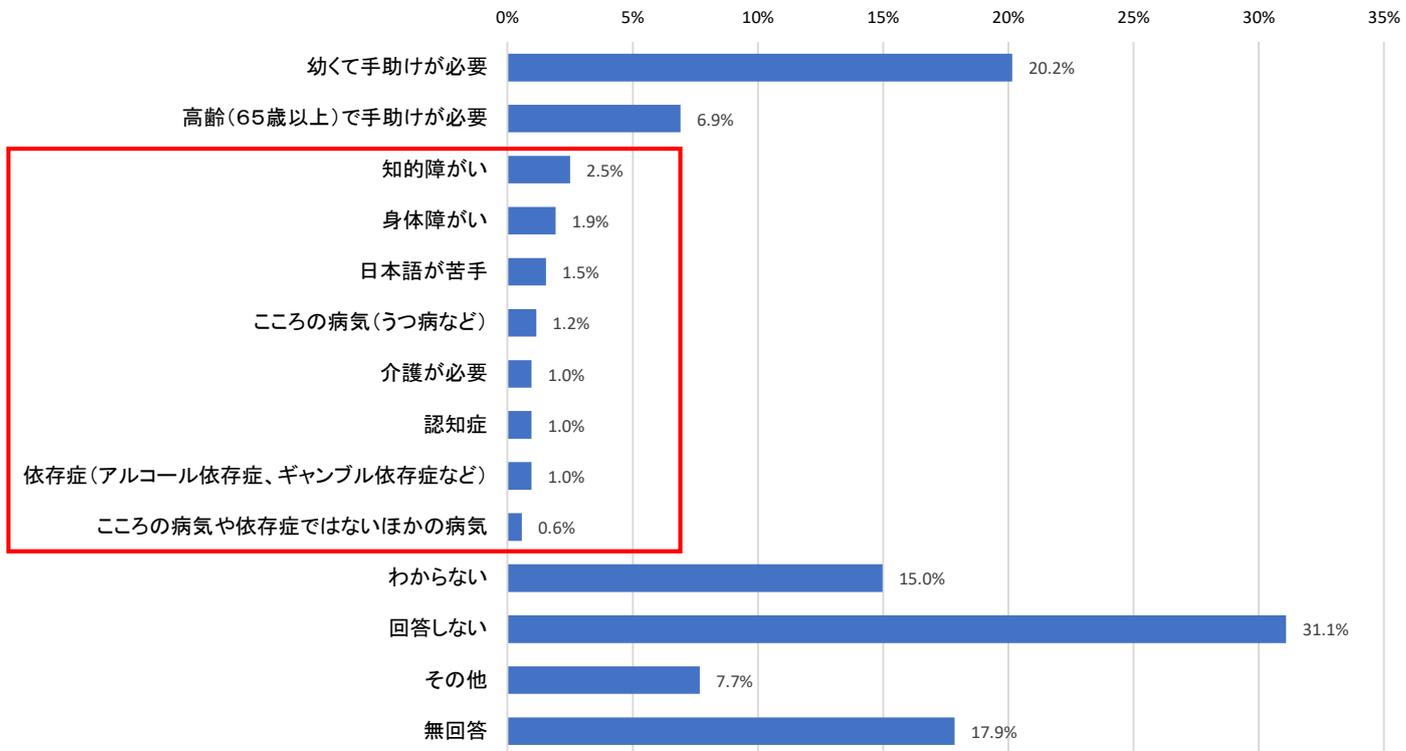
ヤングケアラーの認知度は、自身がヤングケアラーと自覚するほど高まる傾向がある。一方で、ヤングケアラーにあてはまらなると回答した児童生徒の6割以上がヤングケアラーという言葉や内容を知らないと答えており、この中に自覚のないヤングケアラーがいる可能性がある。

## 2：お世話の理由と内容についての分析

### 2-1：お世話をしている理由とその割合

複数

幼くて手助けが必要	高齢（65歳以上）で手助けが必要	知的障がい	身体障がい	日本語が苦手	こころの病気（うつ病など）	介護が必要	認知症	依存症（アルコール依存症、ギャンブル依存症など）	こころの病気や依存症ではないほかの病気	わからない	回答しない	その他	無回答
105	36	13	10	8	6	5	5	5	3	78	162	40	93
20.2%	6.9%	2.5%	1.9%	1.5%	1.2%	1.0%	1.0%	1.0%	0.6%	15.0%	31.1%	7.7%	17.9%

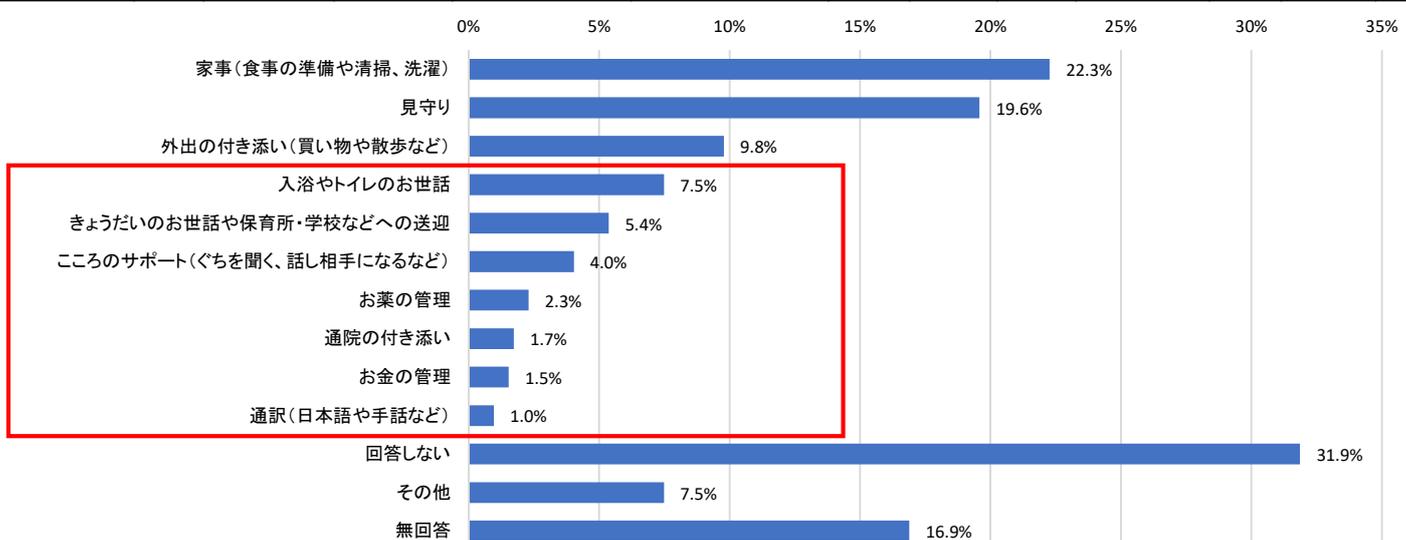


お世話をしている理由の中でも、比較的負担が大きいと想定される赤枠内のお世話に携わっている児童生徒は、お世話をしている児童生徒のうち7.5%（39人）であった。

### 2-2：お世話の内容とその割合

複数

家事（食事の準備や清掃、洗濯）	見守り	外出の付き添い（買い物や散歩など）	入浴やトイレのお世話	きょうだいのお世話や保育所・学校などへの送迎	こころのサポート（ぐちを聞く、話し相手になるなど）	お薬の管理	通院の付き添い	お金の管理	通訳（日本語や手話など）	回答しない	その他	無回答
116	102	51	39	28	21	12	9	8	5	166	39	88
22.3%	19.6%	9.8%	7.5%	5.4%	4.0%	2.3%	1.7%	1.5%	1.0%	31.9%	7.5%	16.9%

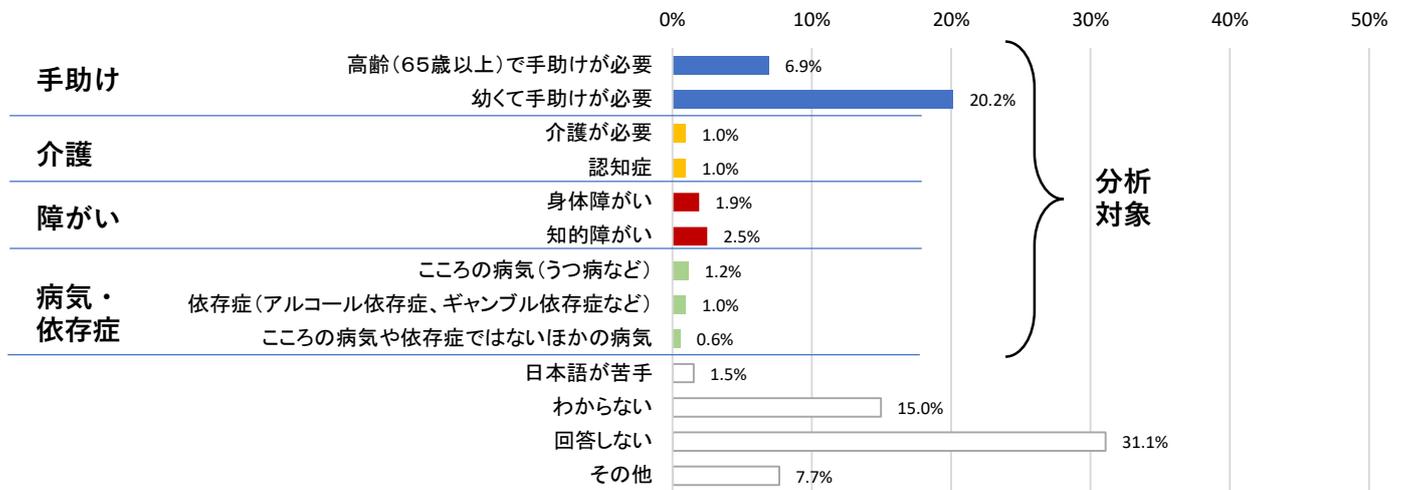


お世話の内容の中でも、比較的負担が大きいと想定される赤枠内のお世話に携わっている児童生徒は、お世話をしている児童生徒のうち17.3%（90人）であった。

### 3：お世話の理由別の比較

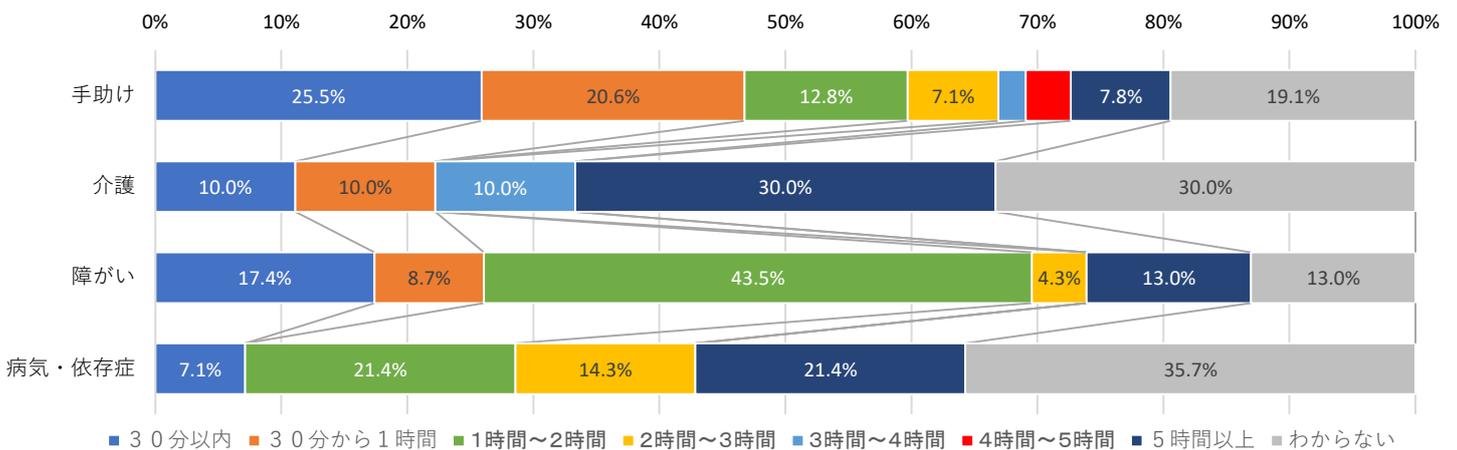
お世話をする理由を「手助け」「介護」「障がい」「病気・依存症」の4に分類し、実態を分析した。

手助け	介護	障がい	病気・依存症
140人	9人	20人	14人
26.9%	1.7%	3.8%	2.8%



#### 3-1：お世話の理由別の1日あたりに費やす時間

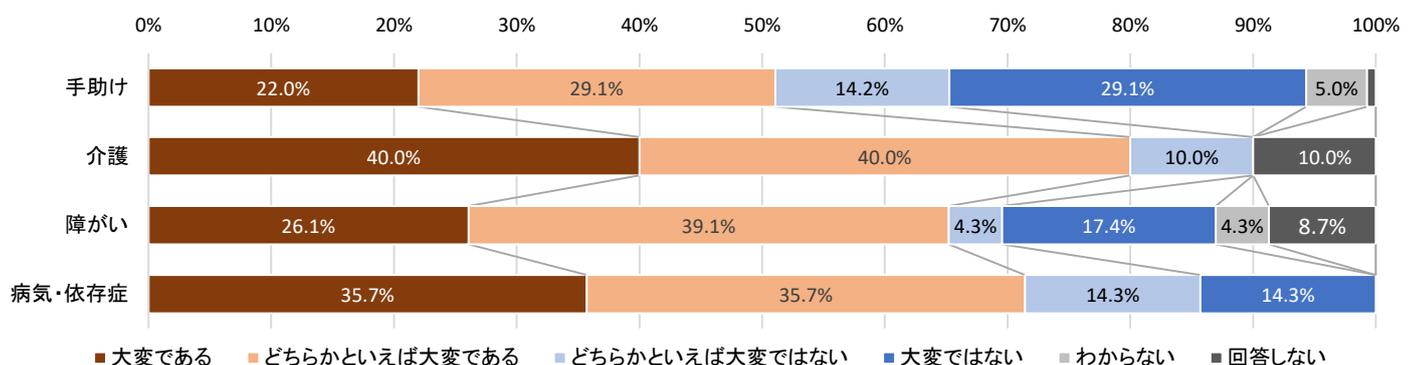
(「お世話の理由」と「1日あたりのお世話に費やす時間」を比較)



「介護」に携わる児童生徒の3割程度が、1日に5時間以上お世話に費やすと回答しており、他の理由と比較してお世話に費やしている時間が長い傾向が見られる。

#### 3-2お世話の理由別の負担の大きさ

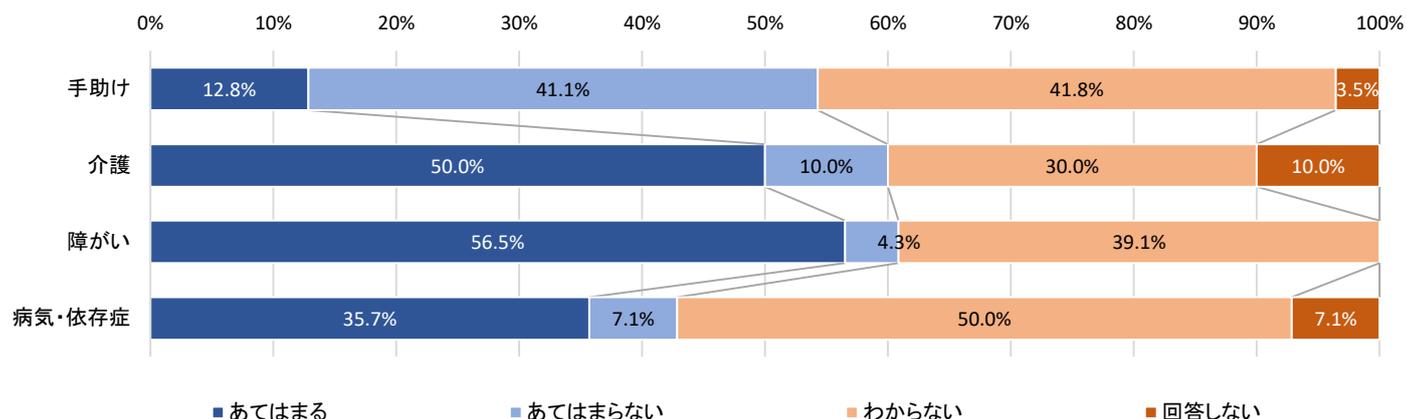
(「お世話の理由」と「お世話の負担感」を比較)



「介護」「病気・依存症」に携わる児童生徒は、どちらかといえばを含めると7割以上が大変であると回答しており、手助けと比較するとお世話の負担が大きい傾向が見られる。

### 3-3 お世話の理由別のヤングケアラーの自覚

（「お世話の理由」と「自身がヤングケアラーに当てはまるか（自覚）」を比較

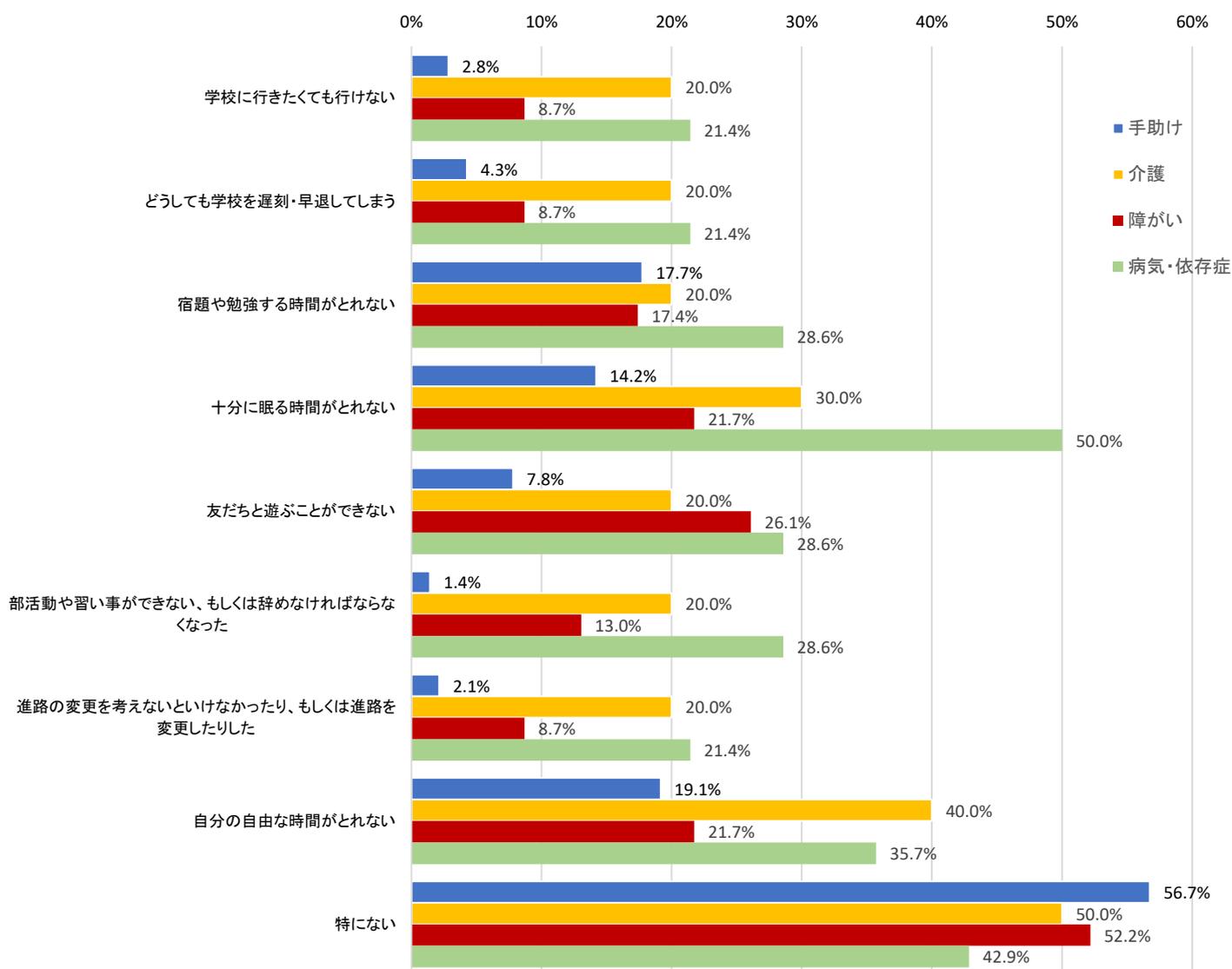


「手助け」に携わる児童生徒で、ヤングケアラーに当てはまると回答した者は1割程度であった一方で、「介護」「障がい」に携わる児童生徒の5割程度が、自身をヤングケアラーに当てはまると回答している。

### 3-4 お世話の理由別の私生活への影響

（「お世話の理由」と「お世話をすることでやりたいけどできないこと」を比較

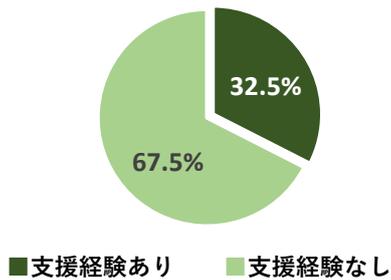
複数



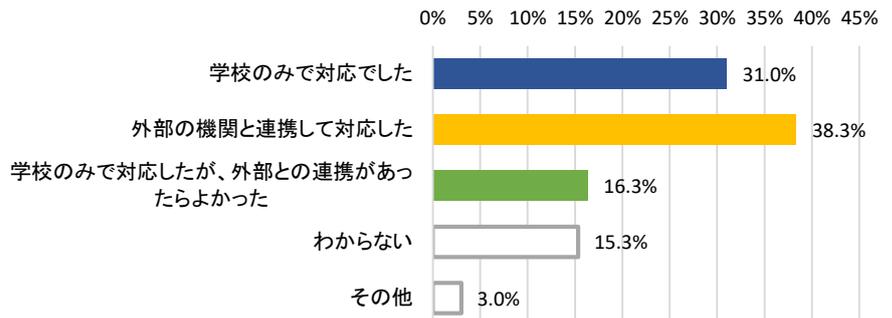
「介護」「病気・依存症」に携わる児童生徒は、睡眠や自由な時間など自分のための時間が確保できていない傾向が見られる。

## 4：ヤングケアラーと思われる児童生徒への対応経験と外部機関との連携状況

### 4-1：対応経験のある教員の割合



### 4-2：外部機関との連携状況



ヤングケアラーと思われる児童生徒への対応経験のある教職員は32.5%（300人）であった。半数近くが学校のみで対応にあたっているが、一方で連携の必要性は半数以上で感じられている状況であった。

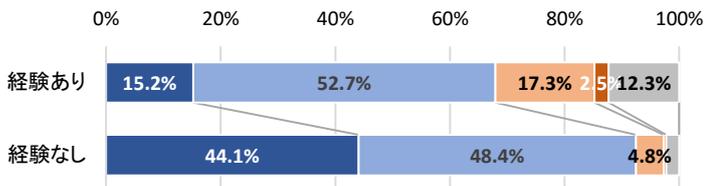
## 5：ヤングケアラーと思われる児童生徒への支援状況

### 5-1：支援経験の有無と支援内容の達成度についての分析（「支援経験の有無」と「支援内容とその達成度」を比較）

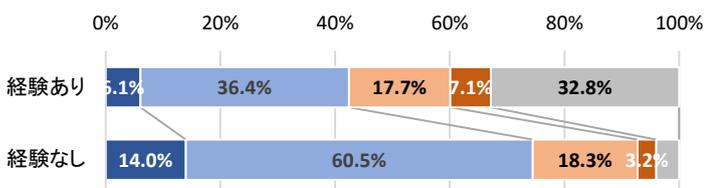
支援経験がある教職員には支援に対する自己評価を、支援経験が無い教職員には相談された際の支援達成度を予想してもらい、それらを支援項目別に比較した。

#### 児童生徒自身や学校生活に関すること

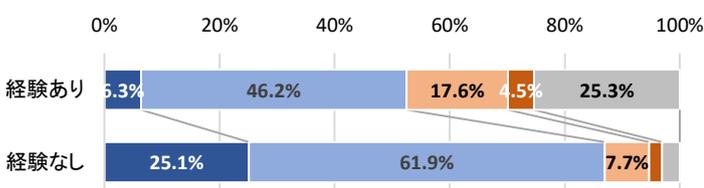
##### 児童生徒自身についての相談



##### 進路や就職など、将来についての相談

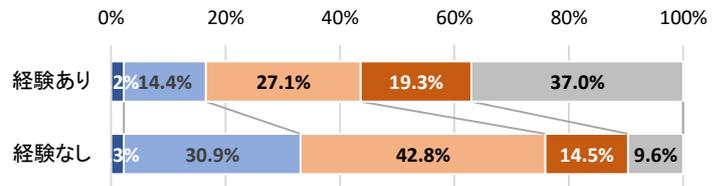


##### 学校の勉強や受験勉強など、学習のサポート

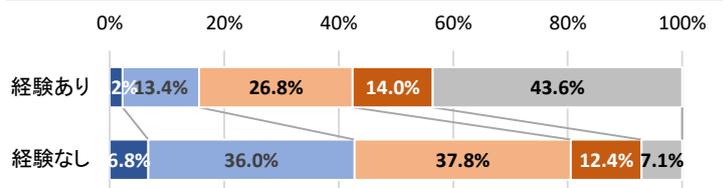


#### 家族や家庭に関すること

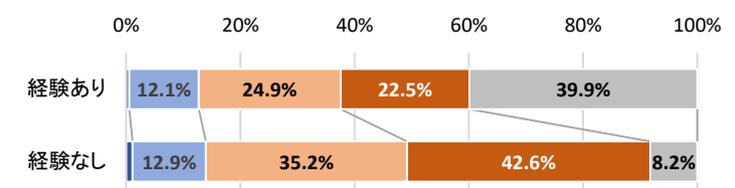
##### 家族のケアに対するサポート



##### 家族の病気や障がいについての相談



##### 家庭への経済的なサポート



■ できた(できると思う) ■ どちらかといえばできた(どちらかといえばできると思う)  
 ■ どちらかといえばできなかった(どちらかといえばできないと思う) ■ できなかった(できないと思う) ■ わからない・無回答  
 ※比較のため「相談がなかった」回答者は除外する。※「無回答」回答者は全ての項目で1%未満のため「わからない」に含める。

すべての項目において、支援経験のない教職員の方が対応や支援をできると感じている結果となった。このことから、支援経験のない者が想定するよりも、実際の支援や対応が困難なものであることが示唆される。また、児童生徒自身や学校生活に関する支援（左側）と比較して、家庭やその福祉に関する支援（右側）は対応が不十分であったとの評価が高まる傾向がある。

## 6：相談手段としての学校用タブレットの有効性

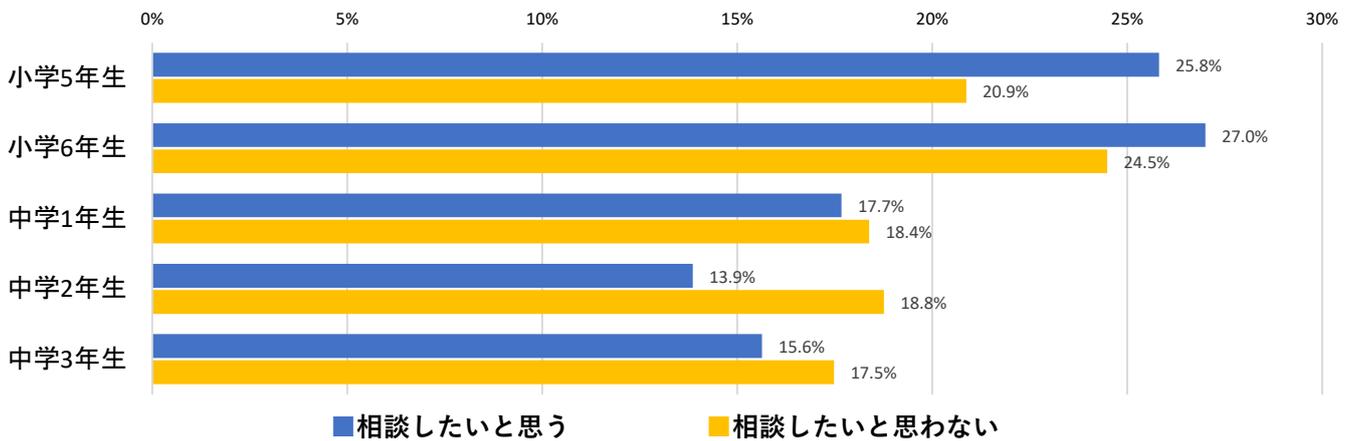
学校用のタブレットやPCに 相談窓口があったら：	相談したいと思う	相談したいと思わない	わからない	回答しない	無回答
	1522	2654	1690	146	33
	25.2%	43.9%	28.0%	2.4%	0.5%

両者を比較する



### 6-1：学年別の学校用タブレットでの相談に対する意識

（「学年」と「学校用タブレットで相談したいと思うかの意識」を比較）

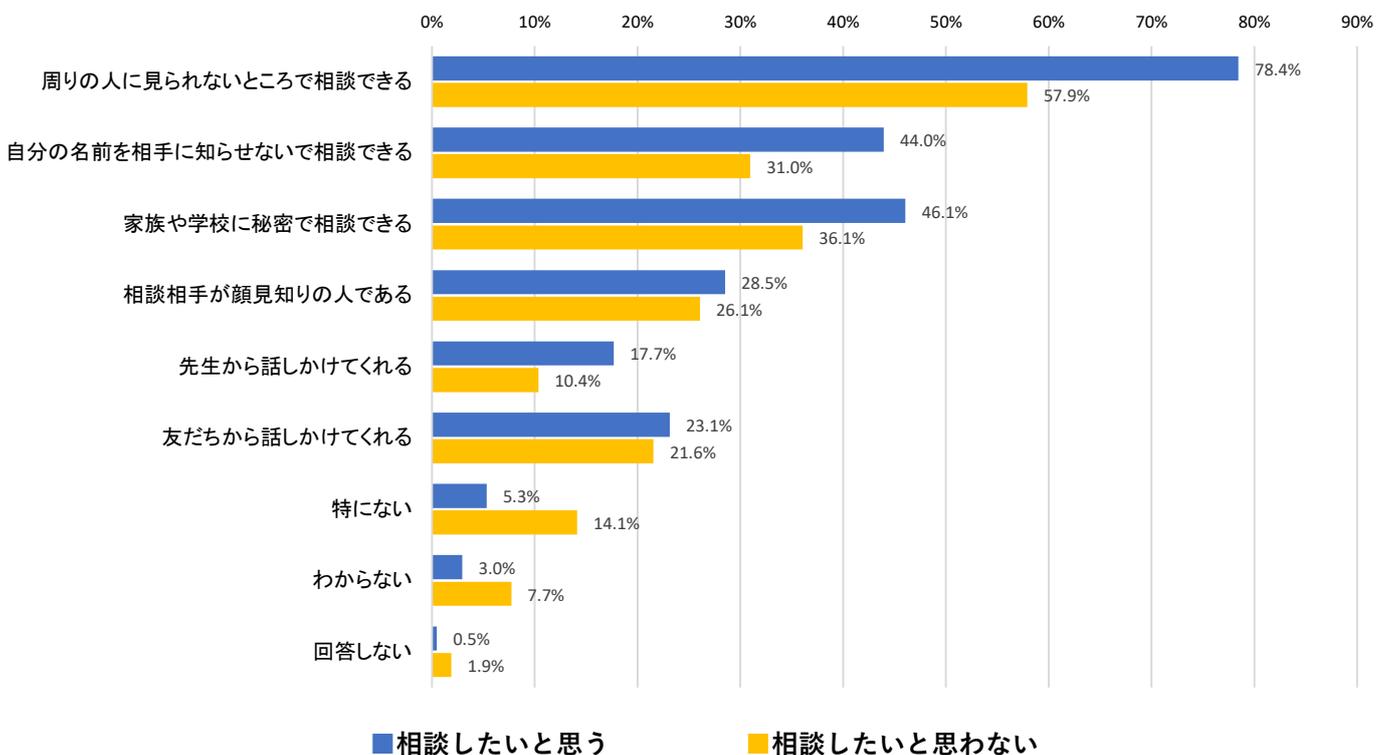


小学校5・6年生では、「相談したいと思う」の割合が高い一方で、中学生では「相談したいと思わない」の割合が高くなっている。

### 6-2：相談しやすい条件別の学校用タブレットでの相談に対する意識

（「相談しやすい条件」と「学校用タブレットで相談したいと思うかの意識」を比較）

複数



学校用タブレットで相談したいと思う者は、秘匿性に関する回答の割合が高く、周囲の視線を気にする者、匿名性や秘密を気にかけている者にとって、有用な手段になり得ることが示唆される。



令和5年度前橋市  
ヤングケアラーに関する実態調査報告書

発行日 令和6年3月

発行 前橋市教育委員会事務局 教育支援課 青少年支援センター

〒371-0015 群馬県前橋市岩神町三丁目1番1号

電話番号 027(212)4039

分析 NPO法人青少年メディア研究協会